

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：27104

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K17413

研究課題名(和文) 看護基礎教育における東洋(漢方)医学教育の必要性の検討

研究課題名(英文) The Necessity of Oriental (Kampo) Medicine Education in Basic Nursing Education

研究代表者

清水 夏子 (SHIMIZU, NATSUKO)

福岡県立大学・看護学部・助教

研究者番号：80468305

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、2017年度入学の看護大学生を対象に在学4年間の追跡調査(質問紙匿名回答、郵送法)を実施した。協力者192名に対し、東洋(漢方)医学に関するイメージや学習意欲の有無等について繰り返し質問し、変化を調査した。その結果、講義、演習、実習と段階的に学習を積み重ねると東洋(漢方)医学に対する学習意欲は高まり、理由も具体的に变化した。しかしながら、実習において学生ごとの体験の違い、学習量の多さ、負担感から受講に対して消極的な学生も一定数存在し個人差があった。また漢方に対するイメージは、入学時以降、著しい変化は認められなかった。以上より漢方について興味を持ち正しく知ることは重要であると示唆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果、学習意欲は、学生の学習状況により変動することが明らかになった。これからの看護教育では、東洋医学教育の導入は急務と考えるが、ただ教育の機会を与えるのみでは、学習効果は期待できない上に学生の負担感のみに終始する可能性が考えられた。また授業時期も注目すべき点で学習意欲の高まりだけでなく、基礎的な医学および概論的な看護について学んだ2年次頃に開講すると東洋(漢方)医学の理論が理解しやすく、看護を考えながら学ぶことができると考える。学んだ東洋医学の知識を臨床現場にどのように活かすか学生が適宜、振り返ることが重要で東洋医学に基づいた質の高い看護実践ができる看護師育成につながるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study was a four-year follow-up survey (an anonymous questionnaire delivered by mail) for nursing students enrolled in 2017. We repeatedly asked 192 participants about their impression of oriental (Kampo) medicine and motivation to learn and examined the changes in their responses over time. As a result, as students progressively advanced through lectures, practices, and practical training, their motivation to learn oriental (Kampo) medicine increased, and the reasons became more specific. However, there were individual differences, with a certain number of students being unmotivated to take the course due to different experiences among individuals during the practical training, a large amount of learning, and a sense of burden. In addition, there were no significant changes in the impression of Kampo after enrollment, suggesting that it is important for the students to become first interested in Kampo and learn it correctly.

研究分野：看護教育学

キーワード：看護基礎教育 看護学生 東洋医学教育 漢方 受講意欲 イメージ

1. 研究開始当初の背景

日本の医学教育における卒業までの到達目標として、2011年に漢方に関する知識の習得が示され、現在では、全国82の全て医学部において、漢方医学教育が実施されるようになった。また臨床現場においては、漢方治療が積極的に取り入れられ、漢方を処方する医師は9割以上というデータもある。一方、看護基礎教育においては、学修指定は未だにない。2011年に全国の看護師養成機関(看護系大学、短期大学、専修学校)を対象に漢方教育の導入について調査したところ、教育を実施していると回答した学校は、469校中17校(3.6%)に留まっていたという結果が明らかになっている。さらに2017年に実施した筆者の先行研究結果では、漢方に対して、ポジティブなイメージを持つ学生ほど、東洋医学に関連した講義を受講する意欲が高かったこと。加えて、東洋(漢方)医学について教育を受けていない学生は、漢方について良くも悪くも根拠のない感覚的なイメージを抱いていること。また、そのイメージは誤解も多いことが明らかになった。以上の結果から筆者は、誤解されたイメージは正しい知識(教育)が与えられない限りは払拭されないと推察している。さらに将来、看護師として臨床現場で勤める看護学生に対する東洋(漢方)医学教育の遅れについて、危機感を持っており、医療現場や患者のニーズに看護も応えるべく、正しい知識を身につけるために東洋(漢方)医学教育を看護教育に早急に取り入れる必要があるという考えに至っている。しかしながら、ただ教育の機会を与えるのみでは、学習効果は得られないということがこれまでの先行研究で明らかになっている。つまり、学生が東洋(漢方)医学に興味を持ち、学習意欲を刺激できるような効果的な授業を展開しなければならない。2017年には、看護学教育におけるモデル・コア・カリキュラムにおいて「和漢薬(漢方薬)について説明できる」という文言が追記されたが、残念ながら東洋(漢方)医学の「何を」「どのように」教育し、看護に繋げていくかについては、明確になっていない。学生たちは看護基礎教育で講義、演習、実習と学習を積み重ねていく。段階的な学習を経て、東洋(漢方)医学に対するイメージに多少の変化が見込まれる。これらのことから、看護学生を対象に在学期間中の東洋(漢方)医学に対するイメージや学習意欲等の変化を経時的に調査することで、看護基礎教育における東洋(漢方)医学教育の具体的な内容と課題について示唆が得られると考え、本研究を実施した。

2. 研究の目的

- ：看護学生の東洋(漢方)医学に対する興味・関心、学習意欲の程度を把握する。
- ：東洋(漢方)医学に対する疑問や感覚的なイメージを明らかにする。
- ：講義、演習、実習と積み重ね学習を経て、東洋(漢方)医学に関する知識やイメージ、学習意欲の経時的変化について明らかにする。

3. 研究の方法

- 調査対象者：看護系大学で基礎看護教育を受ける看護学生
- 調査方法：匿名記載のアンケート調査(計5回)
- 調査期間：看護系大学に入学してからのおよそ4年間(2017年春~2020年春)

➤ 調査時期

- 【第1回調査】<2017年春 1年次> 入学直後
- 【第2回調査】<2018年夏～秋 2年次> 基礎看護実習(初めての患者受け持ち) 直前
- 【第3回調査】<2018年冬 2年次> 基礎看護実習(初めての患者受け持ち) 直後
- 【第4回調査】<2019年夏 3年次> 看護領域別 専門看護学実習 直前
- 【第5回調査】<2020年夏 4年次> 全ての臨床実習 終了後

4. 研究成果

(1) 研究協力者の概要

研究倫理審査の承認を得た後、看護系大学の学長もしくは学部長、学科長宛てに2017年度入学の看護学生を対象とした追跡アンケート調査の依頼を計18校に行った。その結果、5校の看護系大学からの調査協力の承認が得られた。その後、研究対象者となる学生に直面して直接、本研究の目的、方法、倫理的配慮等についての説明を行い、総計495名の看護学生に任意および匿名を前提とした調査協力の同意書およびアンケート紙を配布した。後日、郵送にて192名(38.8%)からの研究協力の同意が得られ、第1回調査のアンケート回答用紙を回収することができた。以降、同意が得られた192名を対象に第5回調査までの調査依頼と郵送法によるアンケート紙の追跡調査を計画的に4年間(計5回調査)実施した。なお、第1回調査から第5回調査の協力者数については、表1に示す。

表1 本研究における追跡調査ごとの協力者数

調査回数	第1回調査	第2回調査	第3回調査	第4回調査	第5回調査
時期	2017年 春	2018年 夏～秋	2018年 冬	2019年 夏	2020年 夏
	入学直後	基礎看護学実習 直前	基礎看護学実習 直後	専門看護学実習 直前	全ての臨床実習 終了後
協力者学年	1年次	2年次	2年次	3年次	4年次
協力者数	192名	130名	109名	123名	117名

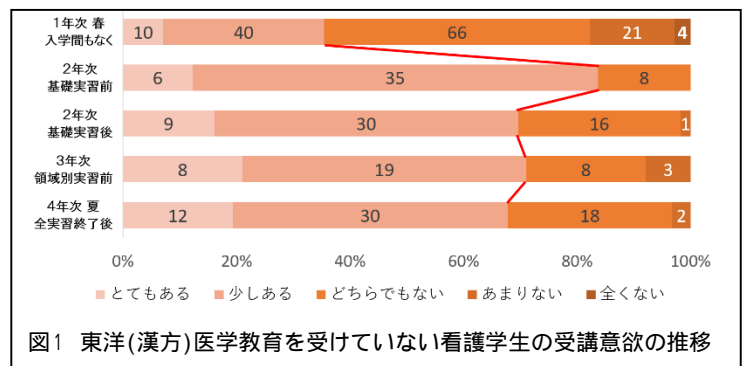
(2) 結果と考察

数多くの先行研究結果で、看護学生は、漢方医学に関する興味が7～8割程度あることを明らかにしており、教育現場で学習の機会を与えることを言及している。学習内容に対する興味と受講意欲は、相関すると筆者も考察していたが、実際に本研究で改めて東洋(漢方)医学に関する興味と学習意欲について調査を実施したところ、5件法(「とても思う」「思う」「わからない」「あまり思わない」「まったく思わない」)で、「とても思う」「思う」を【興味がある】群および【学習意欲がある】群。「あまり思わない」「まったく思わない」を【興味がない】群および【学習意欲がない】群に分けて集計を行った。その結果、入学して間もない1年次の5月時期の学生の意向は、東洋(漢方)医学に【興味がある】群が、26.3%、【興味がない】群が、46.8%と大半の学生が【興味がない】と回答していた。また学習意欲に関しては、【学習意欲がある】群が、42.1%、【学習意欲がない】群

が、14.7%で、興味の有無と学習意欲の有無がおおよそ逆転した結果が明らかになり、その相関比は0.090(p値:n.s.)であった。また学習意欲についてその理由を尋ねたところ、【学習意欲がある】群では、『興味がある』、『日常生活や看護に役立ちそう』、『これから漢方はもっと流行る』等の期待を込めた声が聞かれた。一方、【学習意欲がない】群では、『興味がない』、『覚えるのが大変そう』、『自身の内服経験のトラウマ』など、学習に対する負担感や自身のネガティブな経験が影響していることが明らかになった。さらに自身の学習意欲が【わからない】と回答した学生は、全体の43%と最も多い割合を占めており、その理由で多く聞かれたのが『何が学べるのかわからない』、『漢方について知らないから、興味が持てない』、『話は聞いてみたいが、難しそう』等の声が聞かれた。

以上のことから、看護学生に東洋(漢方)医学に関する学習の機会の必要性は言うまでもないが、学生の興味だけに依存して、ただ学習機会を与えても履修には繋がらないこと。学習意欲のない学生はもとより、学習意欲について【わからない】学生をターゲットに受講意欲を事前に刺激することが重要であり、「何が学べるのか」、「学習および試験の難易度」、「現時点で抱くイメージの転換が期待できる」など、授業開講以前に学生に情報提供を具体的にすることは有用であると示唆された。

上記の結果については、入学間もない1年次の学生の意向であるが、さらに追跡調査をした結果、学習意欲に関して、筆者が当初考察した通り、講義、演習、実習と積み重ね学習をする上で変化が認められた(図1)。



経時的に追跡調査を実施したが、調査時期により調査協力者数に変動が認められる為、各調査結果は、回答者数の割合で評価する。その変動をみると先に述べた座学中心の1年次前期の時期は、学習意欲がある学生数が最も少なかった。しかし、2年次になると受講意欲を示す学生は、最も多い8割以上であった。以降、3,4年次は、7割程度の学生に学習意欲が認められるようになった。また学習意欲が「とてもある」と強い意志を示す回答をした学生が学年を追うごとに僅かながら増加していることが明らかになった。学習意欲があると回答した理由は、『薬理学で漢方を学び興味があった』、『臨床でも使われていることを知った』、『西洋薬より副作用が少なく、体によさそう』、『漢方効果を実感した』等、積み上げ学習の結果、学習意欲が刺激されたこと。臨床現場での漢方の存在を知ったこと等が、学習意欲に繋がったものと考えられる。さらに学習意欲の理由が1年次よりも具体的に変化していることが明らかになった。一方、学習意欲がない学生は、2年次以降、3割程継続して存在していた。その理由は、『受講科目を増やしたくない』、『他にやる事がある』、『興味はあるが、いっぱいいっぱい』と学習量の多さやスケジュールの過密さを負担に感じており、それを理由に受講に対して消極的になっていた。さらに『医療現場で(漢方を)使われているところ

を見たことがない』といった回答があり、同じ臨床実習でも漢方処方や内服の現状を実際に見た学生と見なかった学生で受講意欲が、分かれてしまうことも示唆された。

また東洋(漢方)医学に対するイメージについては、入学間もない1年次時点と東洋医学の概論授業(8コマ)を必修科目として受けた学生、全く受けなかった学生(いずれも2年次時点)、卒業を半年後に控える4年次時点、いずれも著明なイメージの変化は認められなかった。以上のことから、講義内容、方法の検討。講義以外でも東洋(漢方)医学について学んだ知識を学生に繰り返し想起させ定着させることや学内演習および臨地実習で東洋医学を意識した看護実践につながるよう継続した指導が必要であると考えられた。

(3) まとめ

本研究の追跡調査の結果、学生の学習意欲は、学習状況により変動することが明らかになった。これからの看護教育において、東洋医学教育の導入は、急務であると筆者は考えるが、能動的に教育の機会を与えるのみでは、学習効果は期待できないどころか、学生の負担感のみに終始する可能性が示唆された。また授業時期も重要で、学生の学習意欲の高まりだけでなく、基礎的な医学教育および概論的な看護について学んだ2年次頃に関講することが、東洋(漢方)医学の理論を理解し、看護を考えながら受講できるものと推察する。そして、授業前には、なぜ学ぶのか。何が学べるのか。を具体的に示すこと。授業中には、東洋“医学”教育に終始せず、看護学に転換して、学んだ知識が看護にどのようにつながるか。を教授することが重要であると考え。また受講後は、実習中、学んだ東洋医学の知識を臨床現場にどのように活かすか、適宜、学生にリフレクションさせることが東洋医学を学んだ看護師育成ではなく、東洋医学に基づいた質の高い看護実践ができる看護師育成につながるものとする。しかしながら、東洋医学に関する概論授業を必修科目として開講していた大学に所属する学生と受講機会がなかった学生を比較したところ、漢方に関するイメージに大きな変化はなかった。また入学間もない1年次と卒業を半年後に控える4年次を比較しても、漢方に関するイメージに大きな変化が認められず、今後は、講義内容・方法の検討。看護実践への関連性の強化。知識と実践の定着等、多くの課題が考えられた。

以上を踏まえると看護基礎教育において、学生に対し東洋(漢方)医学の教育は、改めて必要であると言えるが、今後、看護界にその考えが広がり定着するためにも、これまで学んでこなかった看護教員および臨床看護師にも東洋(漢方)医学教育を勧め、自身の看護に活かしつつ、実習指導や新人看護師指導にあたること。東洋(漢方)医学の知識を持って患者と関わることで、看護の発展の一助になると期待する。東洋(漢方)医学教育がより質の高い看護実践に繋がっていくことを本研究を通して筆者は強く望む。

<引用文献>

清水夏子,石田智恵美.看護学生の東洋(漢方)医学のイメージと「東洋医学概論」の受講意欲に関する調査研究.福岡県立大学看護学研究紀要.14.11-20.2017

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 清水 夏子
2. 発表標題 看護教育における漢方に関する学修内容の提案
3. 学会等名 日本看護学教育学会第29回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水 夏子
2. 発表標題 看護基礎教育における東洋(漢方)医学教育の必要性 - 看護大学生に対するアンケート調査結果より -
3. 学会等名 第73回 日本東洋医学会学術総会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------